



TITLE:

名前のいろいろ(一)

AUTHOR(S):

上田, 穰

CITATION:

上田, 穰. 名前のいろいろ(一). 天界 1922, 3(25): 18-19

ISSUE DATE:

1922-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159814>

RIGHT:

名前のいろく (一)

上田 穰

譯語 なぎ

我々が考へる所に思想があり、思想が概念と概念、云ひ換へれば言葉と言葉との有機的結合によつて成立つてゐるものならば「我考ふ。故に言葉あり」といつてよい譯である。日本人は日本語で考へ、フランス人はフランス語で考へる。然し日本人は日本語文では話しながらぬ様である。

大學の講義には色々の外國語が挿入せられる。其先生が博學であればある程多種類の外國語が用ひられるかの如く思はれる。所で今ある先生が「私の講義はドイツ語が解らなければ聽かれまい」と言つたとする。しかしこれは、私の講義には澤山ドイツ語を使うから其ドイツ語が解らぬ者は講義がわかるまいと云ふ意味ではない。それは、私の講義する學問は主にドイツで發達した學問で従つて多くの研究がドイツ語で發表せられてゐるから更に深く講義以上に研究しやうとするには是非ドイツ語の素養が多分に必要であるといふことに外ならないと思ふ。

又戰爭中に今迄ドイツ語を多く講義に用ひたこと云ふ醫科の

先生方が英語を用ひる様にしたといつて、新聞が「敵國の言葉を捨てたといつて驕いでも、夫れは何も教授等の場當りではなく學生の參考書としてドイツ書が手に入れ難くなつたのを慮つてのことであらう。

少し横道に外れかけたが私の今言はうと思つたのは、講義に用ひられる所の參考書その儘の外國語なり、又其國へ留學して教はつた言葉を貝物臭サから日本譯しないといふのではないらしいことである。さては又、原語を自分が拙ない日本譯をすることが冒瀆であるを考へての謙遜ではない様だといふことである。しかし乍ら其處に一種の淋しさがある。何時になれば、外國書に代る高等參考書が日本語によつて書かれるか。

其事は先づ置かう。そして今や社會一般が更に高尚なる科學常識を得んと努めつゝあり、先づ「アインシュタイン」を咀嚼せんとして居り、又幸に天文學をある程度まで味ひつゝある狀況である。此時此際、社會に對して天文學を調理しお膳立てすることは我々が社會の一員としての責務であらうと思ふ日本人向きの調理のためには茲に學術語の日本譯が必要であることは申すまでもない。

天文學の内、曆學については我々の祖先は支那から教へられたことが甚だ多い。今我々は天文學全般に亘つて更に多く

